

10. 四国地方の保健所における遺伝相談の現状

近藤 郁子*

要 約：四国4県の保健所における遺伝相談は取り組み姿勢が様々であった。定期的な相談事業を行っている愛媛県以外の保健所では住民の遺伝病への関心が低いこと、遺伝相談の出来る人材不足から、遺伝相談への取り組みは今後共困難であることが推測された。しかし、若者の遺伝病を含む遺伝現象への関心は高く、遺伝相談の必要性は今後益々高まることが予想された。

見出し語：遺伝相談，保健所，四国

研究目的

最近の遺伝子解析技術の進歩によって、多くの人々は日頃の報道を通して遺伝病に関する情報を、比較的容易に得ることが可能になりつつある。なかでも、成人病のhigh riskの検索が遺伝子解析によって可能であることが知られて来ていることから、従来の遺伝性疾患の為のみならず健康増進、保持の為の遺伝相談へと、遺伝相談への住民の関心が高まることが期待される。今回我々は遺伝相談を有効に組織化していくための基礎資料として、住民の遺伝相談への意識を知る為に、四国4県の保健所における遺伝相談の実態と県民の遺伝病に対する知識、遺伝相談への関心度を調査した。

研究方法

四国4県の保健所40カ所の保健所長宛にアンケート用紙を郵送し、回答を郵送していただき

回収した。また、愛媛県民の遺伝の知識と遺伝相談への関心度を知るためには、医療短大の学生にテスト形式によるアンケート調査を行った。

結 果

1. 四国4県の保健所での遺伝相談の実態(表1)
(1) 母子保健事業として遺伝相談がシステム化されている愛媛県における遺伝相談(表2)

愛媛県では県の母子保健事業として昭和52年より、遺伝相談が定期的に行われている。昭和57年における厚生省心身障害研究での遺伝相談の調査によって、全県の保健所で研修を受けた

表1 四国地方の保健所における遺伝相談の現状

県名	四国4県の人口と保健所の数		
	人口	保健所の数	アンケート回収率
愛媛県	1,511,000人	14	4/14(28%)
香川県	1,022,000人	8	8/8(100%)
徳島県	830,000人	8	7/8(87%)
高知県	820,000人	10	8/10(80%)

*愛媛大学医学部衛生学

表2 組織的に遺伝相談事業を行っている県：愛媛県

開始時期：昭和52年より
回答保健所数：4/14 (28%)
遺伝相談を定期的に開催：4/4
回数：2回/月から1回/2月
相談を受ける人：保健所の医師，保健婦
最近5年間の相談件数：1から21件/年間
相談内容：1) 発達，発育の遅れの相談 2) 結婚にあたり家族や親族の病気が気になる 3) 前出生診断に関する事 4) 遺伝性疾患の診断 5) 遺伝病の治療に関する事 6) 従兄弟結婚に関して
遺伝性疾患としてよく相談を受ける疾患：色盲，手足の奇形 兔唇口蓋裂
相談後の対処：1) 必要に応じて病院を紹介 2) 保健所で相談を継続 3) 保健婦が相談者の必要に応じて地域で対処

表4 愛媛県における遺伝相談ネットワーク

第1次遺伝相談 (窓口としての役目)	保健所 保健所の医師と保健婦が対応 日常的な遺伝性疾患の相談 (主にこどもの発達の遅れの相談が多い)
第2次遺伝相談 (遺伝性疾患の診断)	地域の基幹病院 遺伝相談の訓練を受けた医師が対応
第3次遺伝相談 (遺伝性疾患の診断と総合的な家族との対応)	大学病院(小児科，内科) 遺伝性疾患の診断，治療の相談

保健婦と医師が積極的に遺伝相談に取り組んでいることが報告されている(表4)(文献1)。そこで今回最近5年間の活動状況を調査した。14保健所中回答を得た保健所は4つと回収率は28%で極めて低かったが，回答のあった保健所では1ヶ月に2回から2ヶ月に1回の割合で遺伝相談が定期的に行われていた。しかし，内容は発育，発達の遅れの診断や軽度の奇形(兔唇などの)相談が主で，遺伝相談事業が充実し，発展している様子はいかががえなかった。

(2) 保健所事業として遺伝相談を行っていない保健所の実態(表3)

他3県では各保健所の判断で遺伝相談が行われており，計画的な事業としての取り組みはみられなかった。また，今後も考えていないことが分かった。その理由として，県民の遺伝に対する関心が低いこと，また遺伝相談を有効に行い得る人材の不足が上げられていた。

(3) 愛媛県民の遺伝病と遺伝相談への関心度(表5,6)

県民の遺伝相談への関心度を知るために，本年度は愛媛県の若年者(19~20歳)の遺伝学の基

表3 組織的な遺伝相談事業を行っていない県における遺伝相談の現状

	香川県	徳島県	高知県
遺伝相談を行っている所	0/8	0/7	2/10
住民からの相談を受けることあり	7/8	3/7	6/8
受けた時に病院を紹介する	8/8	7/7	8/8
遺伝相談事業の開始計画あり	0/8	0/7	2/8
相談事業の開始計画のない理由			
人材がない	2/8	3/7	3/6
相談がない	2/8	3/7	2/6
保健所に余裕がない	2/8	3/7	0/9

表5 愛媛県民の遺伝学的知識と遺伝相談への関心度調査

対象：10歳代から70歳代の県民		
調査方法：アンケート調査		
結果：18～20歳の男女（医療関係の短大生）		
（男：32人，女：36人）		
遺伝学の講義を受けたこと：あり	68/68（100%）	
授業科目：生物学	68/68（100%）	
保健体育	2/68（3%）	
遺伝学的知識問題：正解率（%）		男 女
1. ヒトの染色体数は48である。		56.3 63.9
2. DNA(塩基)は遺伝子暗合。		59.4 69.4
3. 常染色体の働きは男女で同じ。		46.9 36.1
4. 性染色体は男ではYが二つ，女ではXが二つである。		87.5 94.4
5. 平均7個の変異遺伝子を持つ。		3.1 11.1
6. 約100人に1人は遺伝子異常のために異常になる。		34.4 30.6
7. 血族結婚で異常の発生率が高くなる。		100 97.3
8. 高年齢の両親からのこどもは異常が発生し易い。		87.5 86.1
9. 色盲や血友病は女性に多い。		62.5 80.6
10. 遺伝病患者の両親の一人は必ず異常遺伝子を持っている。		25.0 27.8
11. 癌，糖尿病，高血症に遺伝的な性質が関係する。		90.6 80.6

礎的知識と遺伝相談，遺伝子治療への関心度を調査した。20歳前後の若者では高校での生物学において遺伝学を学習しており，染色体や遺伝子に対する知識は比較的正確であったが，遺伝学の遺伝病への応用は困難であった。一方，遺伝病のイメージは運が悪いことと感じており，遺伝相談，遺伝子治療への関心は極めて高かった。

考 察

住民の遺伝病や遺伝の知識に対する関心度は年齢によって異なることが予想されるが，20歳前後の若者の遺伝の知識は豊富で，遺伝相談への意識は極めて高かった。遺伝子治療は約3分の2は賛成であり，遺伝について日頃から勉強するべきであると考えていた。しかし，遺伝病はしばしばみられる疾患であるとの認識は小さ

表6 遺伝相談についての意識, 関心度

	男	女
1. 遺伝病のイメージ: 暗い	3%	6%
不幸	25%	44%
運が悪い	66%	50%
自分には無関係	6%	0%
2. 近親者に遺伝病あり.	16%	5%
3. 自分が遺伝病の時, 病名を知りたい	91%	97%
4. 自分が遺伝病であることを知ったら		
もっと詳しく遺伝について知りたい	42%	64%
そんなはずない	42%	13%
その時のことは分らない	6%	16%
5. 自分が遺伝病であると知ったら次ぎに何をしますか.		
本を読んで勉強する	36%	42%
親, 兄弟に相談する	13%	13%
病院の医師に相談する	51%	44%
6. 遺伝相談を受けることが出来る所を知っているか.		
病院	25%	42%
保健所	63%	50%
7. 出生前診断について知っている	87%	86%
8. 遺伝についての勉強: 日頃から必要	100%	100%
9. 遺伝子治療に賛成	71%	64%
10. 遺伝性疾患として知っている疾患:		
血友病, 色盲, 兔唇, 筋萎縮症, ダウン症		

く, 自分問題として捉えているものは少なかった。現在, 保健所や病院の様々な診療科で遺伝相談が行われているが, 今後, 彼らが親としてなんらかの遺伝性素因の問題を考える時, 正確で質の高い専門家による日常的な遺伝相談の場の必要性が示唆され, 現在の状況では住民の満足が得られないであろうことが示唆された。しかし, 保健所では住民の遺伝相談への関心は低く遺伝相談の必要性が低いものと捉えており, 今後遺伝相談の窓口として, 再考する必要性が示唆された。

文 献

- 1) 厚生省心身障害研究遺伝相談ハンドブック, 1982年.

Abstract : Genetic counseling at public health centers in Shikoku. Systematic genetic counseling is not carried out in three prefectures in Shikoku, because inhabitants do not need genetic counseling. On the other hand, since 1977, systematic genetic counseling has been carried out at public health centers in Ehime-ken. However, their service has not been active enough to response for needs of inhabitants. Young people in Ehime-ken study genetics at high school and interested in genetic disorders. When they have own genetic problems, they do want to have genetic counseling by professional genetic counselors. Genetic counseling system must be established for young couples in near future.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：四国4県の保健所における遺伝相談は取り組み姿勢が様々であった。定期的な相談事業を行っている愛媛県以外の保健所では住民の遺伝病への関心が低いこと、遺伝相談の出来る人材不足から、遺伝相談への取り組みは今後共困難であることが推測された。しかし、若者の遺伝病を含む遺伝現象への関心は高く、遺伝相談の必要性は今後益々高まることが予想された。